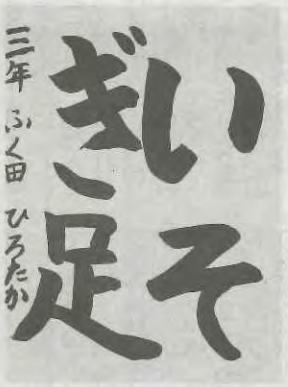
綾部市・中筋小1年　森本　将希

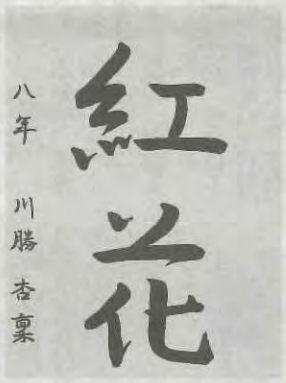
草津市・玉川小4年　今井　彩葉

山科区・音羽川小2年　人見　剛生

伏見区・深草小5年　黒川　俐玖



亀岡市・亀岡小3年　福田　洋岳



左京区・花背小中8年　川勝　杏稟

作文

ジョギング

山科区・鏡山小5年　正木　志穂

今日から、ジョギングを始めることにした。友だちとそのお父さんが「一緒に走らないか」と誘ってくれた。体力をつけることと、少しでも速く走れるようにと。

距離は2・5キロメートルだが、友だちのお父さんは「最初と最後は歩いて、中間だけ走る」と言った。なぜだろう。「すごい」と思ったのは、友だち親子が一度も止まらなかったこと。

私も二人に引っ張られて、しんどかったけれど止まらなかった。友だちたちは、水・金曜日に走っているらしい。私も続けようと思った。

続けるには、宿題や次の日の登校準備、お風呂や夕ご飯をすませておかなければいけない。「きちんとメリハリをつけないと」と思った。まずは一カ月、その次は冬休みまで、という目標をもってがんばりたい。

大きくて ほっとしたおふろ

上京区・正親小5年　奥野　蓮士郎

「あーいやされるー」。おふろの湯につかっていると、気持ち良くて声が出てしまいました。花背山の家で心に残っているのは、おふろに入ったことです。ぼくは、でっかい湯ぶねにつかるのは久しぶりで、家の湯ぶねにつかるのが多かったので、うれしかったです。

早く湯ぶねにつかりたくて、頭や体を洗うのが適とうになっちゃったかもしれません。湯ぶねが中浴場だったのが心残りです。

女子ぶろは大浴場で、中浴場の2倍くらいあったそうで、中浴場でもけっこう大きかったのに、それの2倍あるなんてしんじられないのと、うらやましい気持ちでいっぱいになりました。

でも、おふろが気持ち良かったのであまり気にしていません。最後にわすれ物チェックをして、係の仕事もちゃんと出来たのでよかったです。

山の家に行って、自分のことを自分ですることや、時間を意識することが出来るようになりました。これからも、自分の物は自分でかたづけたり、用意したりしたいと思います。

詩

秋桜（コスモス）

伏見区・京都聖母学院小5年　山下　詩乃

秋桜は
ピンク　白
空を見れば
秋桜が
たくさんの光を浴びている
落ちてくる秋桜は
とても優雅だ
みんなが思っているより
ずっと　ずっと

犬とお散歩

栗東市・金勝小4年　山本　彩音

ルンルンルン
うれしいな
ルンルンルン
楽しいな
秋のお花を
クンクンクン
きっと犬は旅行気分
お散歩いつも楽しそう
わたしも毎日旅行気分

作品募集　小、中学生の作文・詩（いずれも400字詰め原稿用紙1枚以内）および習字（半紙）で、自分の作品に限ります▽作品には郵便番号、住所、氏名、電話番号、学校名、学年を書いたメモをノリづけして、〒604－8577　京都新聞社文化部「少年少女わたしの作品」係へ▽添削することもあります▽作品は返却しません。採用分には図書カードを贈ります。

京大博士パズル　答え

かんかんかな

・雨上がり　・丸聞こえ　・体当たり　・風変わり
・深追い　・落書き　・水増し　・夕暮れ

数字をさがせ

	②	③	④	⑤	⑦
⓪					
③	2				1
④			4		
⑤				5	
⑨		3			6

	⑫	①	③	⓪	⑤
③			3		
④	4				
②	2				
①		1			
⑪	6				5

ねんてん先生の575

661

冬が楽しみになる

植さん。冬の初めの小畑川が目に見えます。小畑川は京都盆地の西側の川、植さんのいる長岡京市をへて、大山崎で桂川と合流します。植さんの句、最後に「サギもいる」とサギを見つけたことで、小畑川の風景をいきいきと表現できました。ちなみに、暦の上では明日が立冬、俳句の季語の世界も明日から冬になります。

小森さん。ひと休みの快さがよく分ります。ただ、あなたの実力から言えば、「ひと休み」はまずいかも。たとえば、「うろこ雲みんなでお茶とおにぎりと」とすると、場面がいっそう具体的になり、その具体的な風景からひと休みの快さが伝わってきます。これ、575の大事なポイントです。つまり、風景で気持ちを表現するのです。

井川さん。おばあちゃんの新米、すぐにたきましたか。私も毎年、新米をもらいますが、まず、おにぎりにして味わいます。塩を少しつけただけのおにぎりです。

さっきも言いましたが、明日から冬です。冬の季語を意識してください。落葉、焼きいも、おでん、こがらし、マフラー、カニ、水鳥などです。冬の季語をたくさん見つけると、冬が楽しみになるかも。

（俳人、京都教育大・佛教大名誉教授　坪内稔典）

俳句を募っています（小学6年生まで）。作品3点までと、住所、氏名、学校名、学年、電話番号を明記し、〒604－8577　京都新聞　読者交流センター「ねんてん先生の575」係。メールは575haiku@mb.kyoto-np.co.jp　3カ月に1度、掲載作品から優秀作を選びます。

小畑川初がも見えたサギもいる
長岡京市・長岡第九小4年　植　みこ

うろこ雲緑茶とおにぎりひと休み
大津市・瀬田北小5年　小森　勇輝

新米だおばあちゃんから贈りもの
京都市・京都聖母学院小5年　井川　円愛

本の海へ

おなかがすいてくる

「カレーのおうさま」
山本祐司 作
ほるぷ出版

書名から、中身を想像する。カレーの大好きなおうさまの話だろうか。いろんなカレーの中で一番おいしいカレーは何かという話かもしれない。

本を開くと、最初は銀色のなべ。「きょうの　ばんごはんは　カレーやで」と宣言する。次のページから、タマネギやジャガイモ、ニンジン、ぶた肉、牛肉、とり肉が登場し、みんな自分が「カレーのおうさま」だと言って、ぶつかり合う。

ピーピーピーと笛を鳴らして入ってきたのはカレーのルウ。「わたしが　いないと　カレーの　あじに　ならないからね。わたしが　おうさまだよ」。リンゴやトマト、ナスやキノコ、ローリエもやってきて、自分こそおうさまだと言いはる。

なべが言う。「はよーつくりはじめな　ばんごはんにまにあわへんで　じゅんばんに　はいりや～」。みんな、かけごえをかけて飛びこむ。それぞれのかけごえが楽しい。

弱火でにこんで、できあがり。なんだか、おなかがすいてきた。